

11 資料と記憶の保存と継承

岡山市では1985年（昭和60）に核兵器の廃絶と平和で幸せな岡山市の建設を願って「平和都市宣言」を行い、この宣言をもとに1989年（平成元）に岡山空襲によって多くの市民が罹災した6月29日を「市民一人ひとりが平和について考え、平和の尊さの思いを新たにする日」として「岡山市平和の日」と決めました。岡山空襲から75年も経過し、「一人ひとり」が平和についてできることは様々にある中、平和を考えるための資産ともいえる体験者の記憶や記録、資料を調査・収集し、守り、伝えていくことが岡山空襲展示室の仕事です。

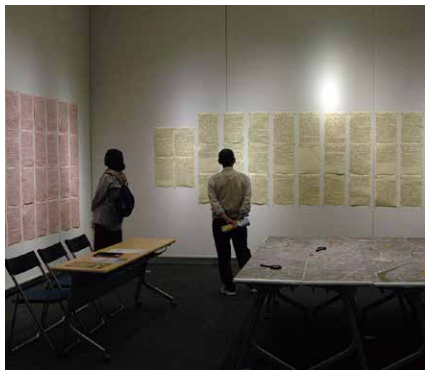
具体的に対象となるものは、体験者の聞き取り調査などにより得られた動画・音声・画像・テキスト等各種データ、実物資料としては書類や手紙、絵画、刊行物、衣類などの布製品、兵器類などの金属製品、写真（焼付）やフィルム、ガラス乾板など多種多様なものがあります。それぞれの性質を知り、クリーニングや撮影、計測などの整理作業を行い、修復や錆除去などの処理をした上で、良い環境で保存していく必要があります。

記憶の保存 聞き取り調査

岡山空襲展示室では戦災や戦争の体験者への聞き取り調査を行っています。調査では可能な限り正確な記録を残すために、動画と音声による記録をさせていただけるようお願いしています。岡山空襲や、戦闘の際の行動だけでなく、体験の背景となる当時の生活や経歴（年齢、住んでいた地域や家族構成、社会的な所属先など）についても時間の許す限りおうかがいしています。うかがった内容は文字起こしを行い、公開しやすいよう、要約を作成します。この際に関係資料のご寄贈や、古写真のご提供をいただくこともあります。



2010年の「第34回岡山戦災の記録と写真展」で戦災体験者の方が思い出の場所に貼った付箋



2010年の「第34回岡山戦災の記録と写真展」での体験談の展示風景



252 戦災体験者の赤兎正年さんの焼失した自宅跡に残されていた鏡。2019年寄贈資料

資料の保存 金属器処理

鉄や合金製品の場合、錆が進行していることもあります。米軍が投下した焼夷弾はほとんどの部品が鉄製であることもあり、錆が進行するといずれ崩壊してしまいます。また、信管や焼夷剤が残留していると危険なこともあります。このため資料の状態を調査し、危険性がないことを確認します。現状の記録を行ったあと、必要であれば専門業者に依頼してクリーニング・脱塩と錆の除去・防錆のための樹脂の含浸・接合・補強や補彩を依頼します。処理後も劣化しないよう、素手でさわるなどして塩分がつかないように留意し湿度の低い場所で保管します。



255 処理前のM74焼夷弾 岡山市北区万成に投下されたもの。全体に赤錆が酷い状態です。

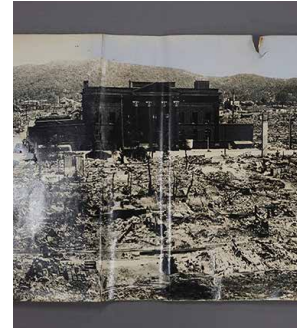


255 処理後のM74焼夷弾 錆を落とし、樹脂を含浸させた状態です。

資料の保存例① 修復作業

経年劣化や付着物・酸性物質の影響によってそのまま保管すると状態が悪くなる資料については、修復を検討します。資料の持つ情報、当時の折皺や書込みといった情報を損なわない、補綴の紙色はどうするかなど、修復方針を決めた上で修復方法を修復家と相談して依頼します。

右の焼付は2019年に岡山空襲展示室に寄贈されました。岡山空襲前後のオリジナルのフィルムや撮影者による焼付はほとんど現存しておらず、とても貴重な資料です。しかし経年により紙が硬化し、裂け目も多数ありました。乱暴に扱うとぼろぼろと裂けるおそれもあり、セロテープで補強してある部分は、糊が古くなり、内部に浸みて変色などをおこす恐れがありました。このために吉備国際大学文化財総合研究センターの鈴木英治教授に依頼して修復を行いました。



1945年（昭和20）、岡山空襲から約一月後に市街地がパノラマ風に撮影された焼付。長さ454cm、高さ28cmありました。14枚の焼付（印画紙）が合成されています。坂本一夫撮影。



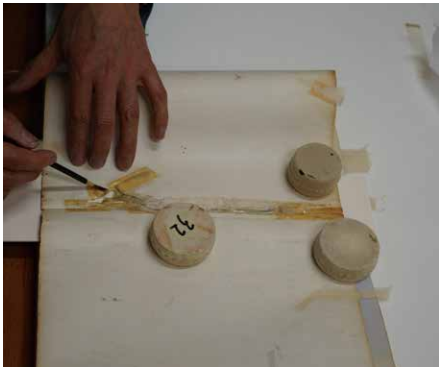
①この焼付は大変長いために、長幅の加湿装置が手作りされました。



②硬化して巻きぐせのついた資料を湿度の高い環境において水分を含ませ、慎重に伸ばします。



③印画面のゼラチン質を傷つけないよう、養生して加重し、平坦に伸ばしていきます。



④セロテープなど、残留すると後に影響のあるもの取り除いていきます。



⑤裏面のセロテープを取り除いたところ。合成するために貼り合わされた部分です。



⑥厚い印画紙に合う厚みの和紙を選び、裂けたり強度の足りない部分に裏面から補綴します。



⑦裂け目の形にあわせた和紙を用意し、メチルセルロース溶液で接着していきます。



⑧全ての繕いが終わった段階で、もう一度水分を加えて平坦にします。



⑨修復終了後、巻きぐせがつかないように、ゆるく巻き、中性紙で作成した収納箱に収めます。

資料の保存例② 古写真の保存

写真には多くの情報が含まれていますが、焼付やフィルムは個人的な内容が含まれることが多く、所蔵者が亡くなると処分されることも多いようです。岡山市は岡山空襲による焼失で多くの資料や写真が失われていることもあり、戦前から昭和前期にかけての街の様子や生活を記録した写真は、個人的なスナップ写真であっても大変貴重です。また、フィルムやガラス乾板は保存環境によっては急速に劣化します。状態の良い間に画像をデジタルデータ化するとともに、適切な環境で保存する必要があります。

かわもとすみお

河本綾男関係資料の整理例

河本綾男は岡山市出身 [1899 年 (明治 32) 生まれ] で 1914 年 (大正 3) に東京神田正則英語学校中退後、大阪毎日新聞社や東京日々新聞社の写真記者を経て、1925 年 (大正 14) 太洋写真通信社を創設し、代表者となります。ニュース写真を中心とした会社であったようで、陸海軍大演習や地方行幸などの報道写真の撮影を許可されていたようです。また、1937 年 (昭和 12) に日中戦争が始まると従軍して取材をしました。同年 12 月 9 日、片翼 3 分の 1 を失って生還した海軍の樫村寛一三等航空兵曹の九六式艦上戦闘機の撮影に成功したことはスクープとして大きくとりあげられたようです。

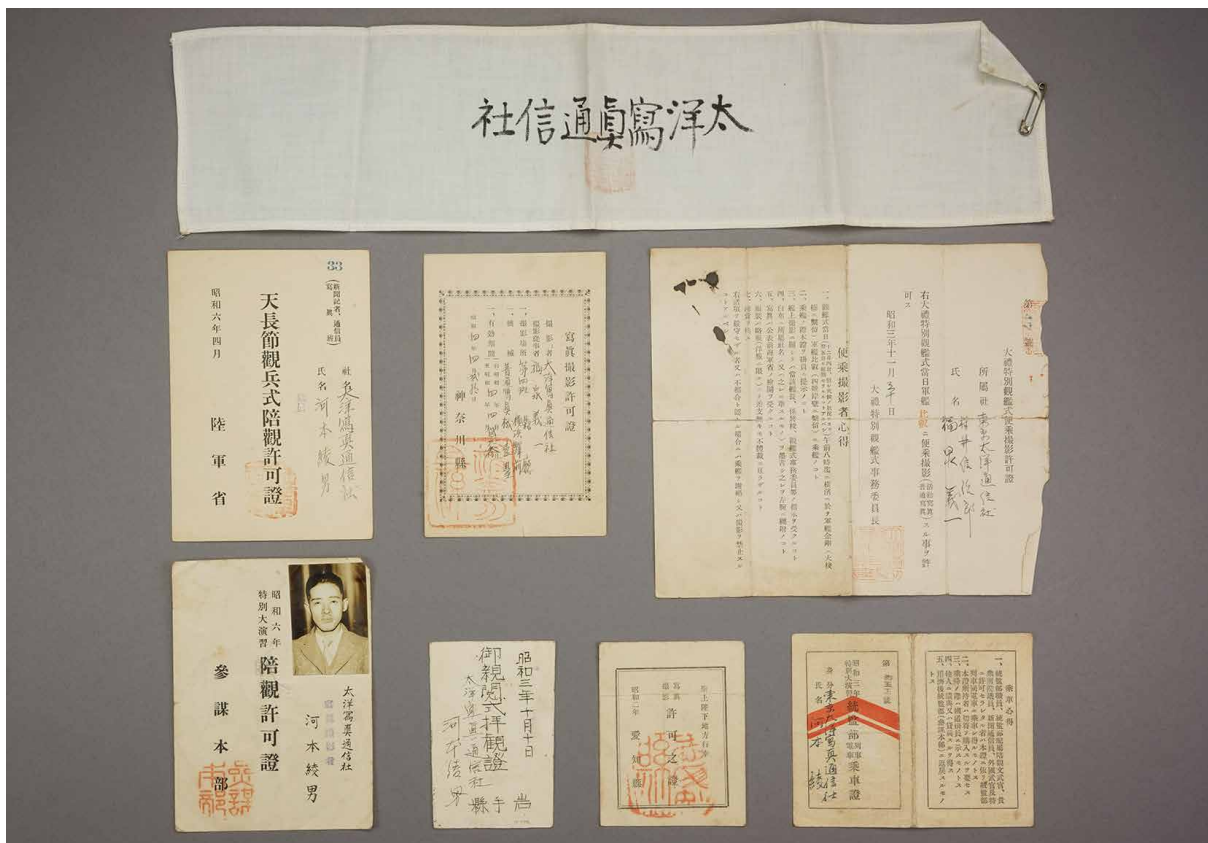
ご遺族からは太洋写真通信社時代の資料と焼付、85 枚のガラス乾板のご寄贈をいただきました。ガラス乾板の中には表面のゼラチン質の変質が進行している資料もあり、クリーニングとスキヤニングを行い、中性紙のたとうと専用の収納箱に入れました。得られた画像には、ヒトラーユーゲントを東京駅前で歓迎する様子や、三原山火口探検隊、終戦直後の皇居前の進駐軍など時代を反映する興味深い報道写真が多数含まれていました。



樫村寛一三等航空兵曹の九六式艦上戦闘機
河本綾男関係資料 焼付からスキヤニング



クリーニングが済み、中性紙のたとうと収納箱に収められたガラス乾板



260 ~ 267 太洋写真通信社の腕章と陸海軍大演習や地方行幸などの撮影許可証 (河本綾男関係資料)



1938年（昭和13）に訪日したヒトラーユーゲント（ナチス青少年団）を東京駅で迎える人々 河本綾男資料焼付よりスキャン



1938年（昭和13）に訪日したヒトラーユーゲント（ナチス青少年団）を東京駅で迎える人々 河本綾男資料焼付よりスキャン



伊豆大島の三原山火口探検（読売新聞主催）から東京へ帰港した船 1933年（昭和8）5月 河本綾男資料ガラス乾板よりスキャン



皇居前の進駐軍 時期不明 河本綾男資料焼付よりスキャン

資料調査 米軍資料など

米軍が作成した膨大な資料は米国立公文書館などに保存されており、近年の米軍資料研究の進展によって対日空襲の様相や目的の詳細があきらかになりつつあります。また、米軍資料以外にも英国軍や英連邦軍資料についても研究が進んでいます。同様に日本軍関係資料や、岡山に残された当時の資料、文書や刊行物などについても調査し、聞き取り調査や展示に活用しています。

岡山空襲中に米軍が撮影した写真。この写真の左上が島田付近、下部中央付近が大元駅付近であることは、2009年に地理情報システムを活用して工藤洋三氏が特定しました。
画像データ提供 工藤洋三



継承 伝えていくために

聞き取りさせていただいたお話やご寄贈いただいた貴重な資料を次世代にひきつぐためには、情報や資料の公開と活用をしていくことになります。少し例をあげると、実物資料を展示する、貸出用の複製品や教材となるパンフレットの制作などがあります。限られた時間ではありますが、ご来場者の目に触れる仕事の「もと」となり「平和のたね」となるものを大事にしています。

